



上川井だより

令和3年11月30日
横浜市立上川井小学校
校長 山崎 真紀子

12月号

非日常から学ぶ日常の言葉の大切さ

校長 山崎 真紀子

早いもので、令和3年もあとひと月となりました。寒風の吹きすさぶ中であっても、子どもたちは元気よく鬼ごっこや縄跳びを楽しんでいます。

11月は、4年生と6年生の2学年が校外学習に出かけることができました。実際に出かけて行って見聞きたり、体験したりすることの大切さを改めて実感します。心が揺さぶられ、豊かに想像が花開き、心満ちた時間を子どもたちも味わうことができたように思います。

4年生の校外学習では、クラシックバレエを鑑賞しました。当日の演目は、小学生用にわかりやすくアレンジされており、初めてでも内容を理解して楽しめるよう工夫されていました。バレエは、基本的に踊りや音楽で登場人物の感情やストーリーを表します。喜び・悲しみ・苦悩・驚きなどを体全体で豊かに表現し、観客は、心に沸き起こった感動や喜び・楽しさ・驚きといった感情を拍手で伝えます。まさに、言葉以外の方法でやり取りが行われるのです。言葉を介在せずとも、コミュニケーションできることを体験できた貴重な機会となりました。

日常生活の中でも、私たちは、無意識に言語以外の情報を使って気持ちを伝えています。例えば、図工の時間に「とても素敵な作品に仕上がったね。」と褒めたとき、褒められた子が「そんなことないよ。全然だめだよ。」と言ったとします。その子の顔がはにかむような笑顔であったり、声のトーンが高かったりしたら、おそらく「本当は仕上がりに満足し、喜んでいる。」と解釈するでしょう。言葉では「だめ」と言っただけでも、伝わる内容は逆の意味になります。それほど、言葉以外の、表情やしぐさ、声のトーン、姿勢、行動は、コミュニケーションにおいて大切な役割をもっています。

しかし、バレエ鑑賞と日常が大きく違うのは、伝える側が無意識であることが多いということです。ついそんな風にふるまってしまう、たまたま直前にいやなことがあり、感情を引きずってつれないそぶりになってしまう、そのような経験は誰にでもあるのではないのでしょうか。伝える側は無意識でも、受け手は言葉以外の情報を受け取りながら判断しています。行き違いがおきるときは、そんなことも原因の一つになっているのかもしれませんが。そうした齟齬をなくしていくには、やはり言葉によって表すことが大切です。受け手が非言語情報をもとに解釈するとしても、伝える側は、意識して伝えたいことを言葉にしていくことを心がけたいものです。本校は、児童数も少なく、みんな互いをわかりあっている仲の良い子が多い学校ですが、気持ちや考えを言葉で伝えていく姿勢を大切にしてきました。

12月は、いじめ防止強化月間です。互いの気持ちがすれ違うことがないように、自分の思いや考えをしっかりと相手に伝えられるように、豊かな言葉の力をはぐくんでいきたいと思います。